

1 東京から満洲最北端の地へ

—須田初枝のライフヒストリー—

聞き書き：資料収集調査員 佐藤 倫子



避難当時3歳の妹(右)と共に東京浅草の母子地蔵で(1998年頃撮影)

須田初枝(すだ はつえ)の略歴

昭和5(1930)年8月5日	東京都目黒 ^{めぐろ} に生まれる
昭和19(1944)年4月5日	第13次興安東京 ^{こうあんとうきやう} 荏原郷 ^{えばらごう} 開拓団として渡満
昭和21(1946)年頃	結婚
昭和37(1962)年頃	ハイラルに移住
昭和50(1975)年	1度目の一時帰国
平成元(1989)年10月	2度目の一時帰国(春陽会 ^{しゅんやうかい} の一時帰国団で)
平成6(1994)年4月	永住帰国(東京都内在住)

はじめに

みんな、子どもたちには話したくない。うちの子どもたちも、わたしがどうやって逃げて、どうやってお父さんと結婚して、中国にいることになったのか、そんなこと知りません。子どもにも孫にも、言いたくない話です。

人生で一番楽しい青春も知らず、50年間中国で暮らしてきました。今でも日本では中国残留婦人、残留孤児とはどういう人達か、おわかりにならない方が多いのではないのでしょうか。残留婦人も孤児も、戦争の時見捨てられた人たちです。決して好きで中国に残ったのではないということだけはわかっていたきたいのです。

わたしは50年間夢にみて、涙を流してきた故郷に帰ることができて、今が一番幸せです。

わたしたちのように、祖国を離れて生活すればこそ、祖国の暖かさ、母国語の懐かしさが身にしみてくるのです。戦争を知らず、平和な時代しか知らない方々には、戦争の悲惨さ、残酷さ、今日の平和の有り難さがおわかりにならないでしょう。九死に一生を得て生き残ったわたしたちの、ただ1つの願いは、2度とわたしたちの受けたような悲惨なことが起こらないよう、いつまでも平和な日本であるように、平和な世界であるように願うばかりです。そしてひとりひとりが日本人として世界に恥じないように生きていってほしいと思います。

これが、50年間中国で歩んできたわたしの道です。

1. 満洲へ：第13次興安東京荏原郷開拓団

生い立ち

須田初枝、昭和5(1930)年8月5日、5人兄弟姉妹の長女として東京目黒の商店に生まれる。恵まれた家庭であったようだ。夏、葉山に避暑に出かけた思い出なども話してくれた。本が大好きで、小学校の作文の時間に「フランス人形の夢」と題したお話を書いて先生を驚かせたこともある。小学校を卒業して、目黒高等商業女学校に入学。その後まもなく、13歳で満洲に渡った。

満洲へ

第13次興安東京荏原郷開拓団に父が部落長として参加することになり、両親、弟3人、妹1人の家族7人、昭和19(1944)年4月5日、新潟から船に乗って満洲へと向かった。現在の北朝鮮の羅津らしんからは汽車に乗り、図們ともん・新京しんきょう・白城子はくじょうしを経由して1週間かけて興安南こうあんなんしやう省に到着。入植地としては満洲の最北端にあたるモンゴル、ソ連と国境を接する場所だった。

田舎のないわたしには、何もかも珍しく見えました。興安の町から馬車で、これから生活する部落に行き、あてがわれた我が家を見てびっくりしました。土で作った家で、電気どころか水道もガスもなく、その上、おトイレもついてないのです。東京で生まれ、東京で育ち、何不自由なく暮らしていたわたしは、世の中にこんな家があるのかと思ったくらいでした。

第13次興安東京荏原郷開拓団

この開拓団は東京都荏原区小山こやまちやう町むさしこやまの武蔵小山商店街商業組合を中心に、第1次中小企業整備によって転廃業した人々によって結成された。業種は154種に及んだ。農業経験者が皆無で、参加者は東京郊外の研修所で農業を学んでから満洲に向かった。昭和18(1943)年に東京開拓団¹の募集があり、初枝の父ひとりだけがこの商店街ではなく、目黒で個人商店を営んでいたのだが、請われて部落長として参加した。父は終戦を迎える前に、脳溢血により亡くなっている。

「戦争が終わったら、新京の中学に入れてあげるから」とわたしを慰めてくれていましたが、父は終戦の1ヶ月前、脳溢血で倒れ、わたしたち6人をおいて、帰らぬ人となりました。一家の大黒柱を失ったわたしたち一家は途方に暮れましたが、日本に帰ることもできず、わたしと母が父の代わりに、ほかの人たちと一緒に畑の仕事をすることになりました。そのころ、戦争は相当悪化していたようですが、子どものわたしは何も知るはずはありません。

2. 知らされなかった終戦、そして逃避行

8月9日、ソ連軍侵攻

ソ連が参戦した昭和20(1945)年8月9日時点の在籍者は1,142名、現地召集による応召者178名で、在団者は964名であった。16の部落を有する大規模な開拓団である。この開拓団は入植後僅か1年10カ月で敗戦の日を迎え、死の逃避行を経験することになった。日本への帰還者はわずかに53名、わずか5%にも満たない生還率。中国に残留した団員はその約半数の25名にものぼった。ソ連の侵攻と「匪賊」(以下括弧略す)の襲撃により、壊滅的な被害にあった開拓団である²。

この開拓団は、「索倫」^{さくりん}「阿爾山」^{あじさん}に駐屯していた日本軍に野菜、食肉を供給することを任務としていた。8月9日のソ連参戦の報がはいった日にも、小学生まで動員して野菜の搬出を行っていた。興安の町では既に邦人の避難が始まっていたのに、荏原郷開拓団が避難しはじめたのは12日になってのことだった³。

みんなその時は死ぬ覚悟でいたんですから。わたしたちの開拓団の北の方にもう1つ開拓団があったんですよ。その開拓団と一緒に戦う、なんてそんなこと言ってたんです。そこにはあんまり開拓団がなくて、1つだけあったんですね。一緒に最後まで戦いつくすって言うのかしら。あの頃はみんなそんなでしたね。負けるのは恥なんです。負けて生きるってことは一番の恥でした。そのころの日本人にはね。最後の1人まで戦うってそういう精神なんですよねえ。わたしたちみんな、逃げるなんて考えてなかった。もっと小さい子はどうかかわからないけど、わたしたちみたいな13歳、14歳くらいの子はもうみんなそんな考えになってましたね。

逃げずに働いていた団員たち。非常時とはいえ、どこからも避難命令は出なかったのだろうか。ソ連参戦の知らせを聞いた興安の町では満拓公社からも具体的な避難命令は出されず、各自自由行動ということで、避難するしないは個人の判断に任された。そんな中で荏原郷開拓団では逃げる準備はせず、できるだけ軍隊向けの食料供給や傷病兵の手当てに携わろうとしていた⁴。

ある日、畑の仕事で疲れ、昼寝をしていると、ドーンドーンという大きな音で目が覚めました。外に出て見ると、興安の町は火と煙で何も見えませんでした。町から逃げて来た中

国人が言うには、町には日本の軍隊は1人もいないのに、どうして早く逃げないのか、とのこと。聞けばソ連が日本に宣戦布告して、ソ連軍は興安に侵入してきたのです。頼りにしていた関東軍は、いち早く撤退していたのでした。頼りにしていた軍隊がいなくなつては、誰を頼りにするのでしょうか。わたしたちの開拓団は16の部落に分かれていて、一つ一つの部落の距離はそうとう離れているので、ソ連軍や暴徒達に襲撃された時、連絡がつかない恐れがあるので、中央にある部落に全員集合しました。暴徒は毎日のように開拓団に向かって襲撃してくるので、一步も外に出られません。満洲に来てたった1年と4ヶ月で、父を亡くし、終戦を迎えました。中学校どころか、敗戦という地獄のような悲運が待っていたのです。

役員たちは、いつまでもこのような状況では、食料が絶えると心配していた時です。2、3人の兵士が来て、白城子で合流するから早く出発するように、とのこと。食事のことや、いつソ連軍や暴徒に包囲されるかわからないので、この日本人か中国人か身分のわからない兵士の道案内を頼るほか、方法がなかったのです。開拓団の人数は、たぶん900人近くだと思いましたが、若い男性は出征し、残ったのは女子ども、年寄りが多く、男性といっても皆40代以上の人たちで、頼りない長蛇の列を組んで、開拓団の逃避行がはじまったのです。

死の逃避行

白城子には日本の軍隊がいる。そこまで行けばなんとかなる。軍隊を頼りにしての逃避行だった。

子どもを背負う母親たち、小さな弟や妹の手を引いて行く子どもたち、年寄りや病人を馬車に乗せ、日本の軍隊がいるという白城子に向かって歩き始めました。太陽が西山に沈み、あたりが暗くなって来た時、西山から銃を撃ってきたのです。私達は役員達の指図で、東山の方に登り、もうすぐ頂上という時に、東山の岩場にも暴徒たちが待ち伏せていて、わたしたちに射撃してきたのです。飛んでくる弾はひゅーんひゅーんという音ではなく、プッス、プッスと音をたてて、わたしたちの目の前の地面に当たります。前の方にいる暴徒たちの顔がよく見えるほどの、近い距離でした。開拓団から撃った弾が暴徒の指揮者に命中したので、暴徒たちはやむを得ず引き上げていきました。襲撃は長くは続きませんでした。

匪賊の指揮をとっていたのは他ならぬ、「道案内を勤めよう」と申し出た国籍不明の兵士だった。絶望の中、自決をはかる者が続出する。

暴徒が引き上げていった後、希望をなくした人たちは、薬を飲み始めたのです。薬といっても、今の青酸カリのように早く死ねません。苦しみながら私の目の前で死んでいく友達、あちこちから聞こえる苦しみの声、側で見ている人たちの泣き声が聞こえ、悲しい、

淋しい夜でした。わたしたちはきれいに輝いている星を眺め、亡くなった人たちを胸に思いつつ、1日の疲れでいつしか眠ってしまいました。

死ぬのはこわくなかった。もうわからなくなってたねえ。毎日人が死んで。麻畑（で集団自決し多くの人がなくなった日）の前の日、初めて匪賊に会った日に、誰が配ったか知らないけど、薬持ってる人もいて。それを飲んで死のうとしたんですね。わたしの目の前で男の子がその薬を飲んで。でもなかなか効かないんですよ。「どうだ」って聞いたら、「ちょっとお腹がおかしい」って言って、そのうちにこう、苦しんでね。なかなか死なないから大人の人が刀でお腹を刺したんですけどそれでもだめで。2回刺してもだめで。首を刺されてやっと死にました。人間の体っていうのはちょっとやそっとじゃ死なないですよ。丈夫です。

開拓団幹部の1人が娘さんを殺して。「お父さん殺して」って言ったんですねえ。もうだめだと思って。その人が「俺は娘を殺したぞ」って大きい声で叫んでるの聞きましたよ。それを聞いてみんな自分の子どもを殺して。どうもできませんよ。かわいそうでも。自分のことでいっぱい。ちょっと見てみたら子どもが並べて殺されてた。

夜だと鉄砲が赤く見えてね。わたしたちは本部だから一番先に行くんですよね。それで「こっちの山に登れ」って言うから登ってみるとそこに匪賊がいて、反対に行ってもそこに匪賊がいて。山の上から鉄砲撃つから、もう。わたしのとなりにいた犬も死んじゃった。鉄砲にあたって。

この惨劇の翌朝。また白城子を目指して逃避行は続く。

翌朝目をさますと、昨夜何事もなかったような、静かな朝でした。わたしたちは道ばたに溜まっている泥水を飲んだり、水筒に入れたりして、また白城子に向かって歩き続けました。雲一つない、暑い暑い日でした。歩いている間にもソ連の飛行機がわたしたちの上を飛んでいます。出発の時と比べると、年寄りや小さな子どもが少なくなっているのに気づきました。

みんな、負けてるの知らないで、白城子に行ったら兵隊さんがいる、それを頼りにしてね。

麻畑での集団自決

お昼頃大きな麻畑のある所でおにぎりを分け合い、食べ終わり、いざ出発という時、また暴徒が襲撃してきたのです。「早く畑の中に入れ」という声に皆気づき、麻畑の中に入りました。麻の高さはわたしの背丈くらいでしたので、暴徒からは見えないと思って安心して

いたのですが、昨夜の襲撃より激しく、地面に伏せていても弾にあたるくらいです。死んだ人を畑の奥のほうに運んだり、傷ついた人たちの手当で大変な騒ぎでした。家族そろって自決する人たちも増えてきました。殺されるのも知らず、きれいな服を着せてもらい、喜んで親に抱かれ、畑の奥のほうに行き、二度と戻ってこなかった子どもたちのあの笑顔、今でも夢に見ます。暗くなると暴徒たちは銃を撃ちながら引き上げていきました。

そうびょう
双廟村麻畑に入ったのは 坪川氏の記録によれば昭和 20(1945)年 8 月 17 日。団長を含め 303 名が命を落としたと推定されている⁵。同じ頃(8 月 14 日)この麻畑近くの葛根廟駅かつこんびょうでは、ソ連軍の戦車による無差別機銃掃射により、避難のため列車に乗り込んでいた開拓団員 1,000 人以上が死亡する、といういわゆる葛根廟駅事件が起きていた。

その夜、開拓団の役員たちの意見が分かれました。団長は、毎日このように襲撃を受けていたのでは、女、子ども、年寄り達をつれて目的の白城子まで行くのは不可能だから、団員そろって自決するほか、方法がない、という意見でした。副団長は、1 人でもいいから、石にかじりついてでも生き残り、日本へ帰り、開拓団の最後を日本人たちに伝えなければならない、という意見でした。最後は畑に残り、自決するか、逃避行を続け行けるところまで行ってみるか、自分の判断に任されました。団長をはじめ、畑に残る人たちは、逃避行を続ける人たちと、手を握りあい、涙を流しながら、命を大切に、日本へ帰るよう、自分たちの願いを託して畑の中に入っていました。その後ろ姿がたまらなく悲しくみえました。わたしたちが出発しはじめた時、畑の中から銃声が次々と悲しく聞こえてきました。心は残りましたが、300 余名の屍を後にして、重い足を引きずりながら、星ひとつ見えない闇の中を、白城子に向かって歩き続けました。意地悪な雨がふってきて、泥水となった道なき道を、誰一人話をする人もなく、黙々と、前の人に遅れないようにしていくのが精一杯でした。女、子ども、老人たちはどんどん後ろに残されてしまいます。もう誰も、お互いに助け合うことは出来ません。そんな力はないのです。自分だけでも大変で、力がなければ家族でさえバラバラになってしまうのです。夜が明け、雨が止み、見ると、ついてきた人たちは相当少なくなっていました。前の夜から一睡もせずに、雨と泥水の中を歩いてきたのです。逃避行の苦難は極限に達し、家族も別れてしまい、歩けなくなって、若い人たちに、おまえたちだけでも無事に逃げてくれと、自分ひとり残るお年寄りもいました。

初枝はこの麻畑から母・弟 3 人と妹とともに逃げた。麻畑からの脱出者は 375 名。脱出後の死者は 297 名⁶。過酷な逃避行を物語っている。連日の匪賊の襲撃により、またたくさんの方が亡くなった。そんな中、初枝は当時 3 歳の妹を背負い、大人たちが自分の子どもを見殺しにしている場面を目の当たりにしながら、小さな妹を守ろうと、必死で歩きつづける。

わたしの家族は、わたしが父の遺骨を抱いて、12歳の弟と10歳の弟2人は、妹を代わる代わるおんぶして、母は8歳の弟の手をひいて歩いていたのですが、2人の弟は妹を背負ってわたしたちより先に行ってしまいました。わたしも父の遺骨を抱いて、夜昼もなく歩いてきたので、疲れ果て、母と相談してお骨だけを風呂敷に包み、妹たちの後を追って行こうとした時、暴徒たちが柄の長い鎌を振り回しながら馬に乗ってわたしたちの中に突入してきたのです。傷ついて倒れる人、死んでいく人、地獄そのものでした。この混乱の中、わたしは父のお骨を畑の中に隠しました。暴徒たちが引き上げていった後、畑の中を探しましたが、お骨は見つかりませんでした。悲しみと落胆は、言葉では表現できませんでした。ただ、心の中で父に謝るほかには、どうしようもなかったのです。いつまでも探しているわけにはいきません。他の人たちはどんどん先に行ってしまうていたし、暴徒たちがまた引き返してくる恐れもあるのです。気がついてみると、わたしより3歳下の女の子だけが残っていたのです。わたしの家族は、このとき離ればなれになってしまいました。

妹を背負って

麻畑を過ぎて翌日。山に逃げて。妹は、弟がおぶって逃げたんです。わたしはお母さんともう1人の弟と一緒にいて。この弟が小さいでしょ。歩けなくなっちゃって。疲れて、寝たら起きないんですよ。それで、母が先に行って妹を見てきてくれて。わたしは山のこっち側に下りていったら、匪賊がそこに上がってきたんです。わたし、山のこっち側に逃げて。母はその反対に逃げて、別れ別れになりました。今もないから、死んだと思います。生きてれば帰ってくるでしょ。あの時33歳だから。それで、別れて、山の下に坪川さんとあと何人か日本人がいて、その人たちと一緒に山の中逃げて。そしたらまた日本人が何人かいたんですけど、そこで弟が妹を置いていっちゃった。重たくて。あの時弟だって小さくて。11歳くらい。妹が3歳。大人だって子供を捨てていったんだから。行ったら妹が泣いてるんですよ。「お兄ちゃんは？」って聞いたらどっかあっちのほう行っちゃったって。

もう、匪賊ばかりいるんですよ。刀みたいな、草を刈る道具なんですけど、こういう長いので、これ持って馬に乗って切っていくんだから。わたしは本当に運がいい方。これでみんな怪我したり、死んだり。ほとんど死んじゃいました。切られて怪我して泣いてる人もいるし、親が死んで子どもが泣いてるし。でもどうにもできないから、黙って行っちゃうんですよね。小さい子たちが泣いてたけど、連れていく力もないし。自分の子ども連れて逃げるのも必死で、余所の子なんて全然。自分の命も今日、明日もわからないですからね。

家族は散り散りとなり、わずか13人となった開拓団の列に、初枝と妹は加わって逃避行を続けていた。その時に関東軍の兵士たちに遭遇する。人の足音が聞こえれば

ソ連軍や匪賊の襲撃だ、と瞬時に判断してしまうほど、連日の攻撃ははげしかった。

わたしたち一緒に残ったのは、13人になってしまいました。大人の男性がひとり、女性は3人。あとはわたしを含めて9人の子どもたちでした。途中には、親とはぐれて泣いている子、死んだ親の側で座っている子。その子どもたちを見て涙が出ますが、どうすることもできないのです。わたしたち13人はあてもなく歩き続けたので疲れ果て、丘の上で休むことにしました。13人の中の、たった1人の男性が、様子を見てくると出かけましたが、すぐ戻ってきて、5、6人のソ連兵がこちらに来ると言いました。誰一人立ち上がる人はいませんでした。ソ連兵が来ると聞き、1人の母親が、3歳になる女の子の首を手拭いで絞め始めましたが、誰一人止める人はいません。そのとき、「あんたたちは日本人ではないのか」という日本語を聞き、びっくりして振り向くと、ソ連兵だと思っていたのが日本兵だったのです。兵士はぐったりしている女の子に薬など飲ませて、「どんな時でも早まってはいけない」と励ましてくれました。この日本兵たちも本隊とはぐれ、白城子まで行きましたが、白城子には日本の軍隊はいなくて、ソ連の軍隊ばかりで、先には行かれなかったそうです。それからは、行く先もわからず、ただ日本の軍隊を探すしか方法がありません。

兵士の足にはついていけない女と子ども。しまいには取り残されて8人となってしまふ。保護してくれるはずの日本軍はもう白城子にはいない。生き延びるためには中国人の家庭に入る他に方法がない。

3. 中国「残留」の経緯

妹を連れて中国人家庭で働く

8人、女と子供だけが残って。4人ずつに分けて中国人の家につれていかれたんです。わたしと妹とTさん親子と、4人。Tさんはすぐ中国人のお嫁さんになってね。そうしないと生きていかれないから。わたしと妹は子供が3人いる家に引き取られたんですけど、いろいろ仕事させられて。

日本の兵士に出会い、心強く思っていたのも束の間、暗い夜道を子ども連れの子や、子どもたちは、足の早い兵士たちについていかれるはずがありません。まして、その夜もまた雨が降り、1メートル先も見えない位の暗闇です。わたしたち8人の女、子どもたちは遅れてしまい、声を出して呼べばまた暴徒達に襲われる恐れがあるので、8人お互いに抱き合って、雨の降る一夜を外ですごしました。翌日はいいお天気でしたが、西も東もわからないわたしたちは、ソ連兵や暴徒たちに見つからないように、あてもなく歩いていました。2人の中国の男性に会い、わたしたちは4人ずつ離ればなれにされてしまいました。わたしと妹は、王という人の家で働かされました。

ここで別れた 13 人のうちの一家 4 人は、幸運にも興安の町までたどり着き、なんとか引き揚げ船に乗って、帰国を果たしている⁷。運命の分かれ道。残された 8 人はそれぞれ中国人の家庭に入るようになった。小さな妹を守るために、15 歳の初枝は必死で働きつづける。

毎日の食事もおなかいっぱい食べられないので妹は痩せて、病気になってしまいました。おなかがすくというより、小さいながらも精神的に参ってしまったのでしょう。もちろん、薬もありません。その上、妹を邪魔にして、人にあげろと言いつづけるのです。わたしが畑に行った後、妹を人にあげてしまうのが怖かったので、妹の病気がよくなってからは、畑に行くときは妹をつれて行き、わたしのそばで遊ばせていました。

妹はかわいい顔してるもんだから、みんな欲しがって。わたしが働いて帰ってくると、連れてっちゃっていないってこともありました。その時はとり戻しに行つてね。

決死の逃亡

1 ヶ月ほどの労働に耐えた後、妹を連れて夜道を逃亡した。

そこから妹と 2 人で逃げました。興安に戻ろうと思って。夜、山のほうに向かって逃げて。夜になると狼がおそろしいから、中国人でも追いかけてこられないんですよ、山の中は。山の上から道が 1 本白くすーっと見えててね。そこを行けばどこか部落があるだろうと思って。後ろから、「帰ってこい」って怒鳴ってましたけど。狼もおそろしいけど追っかけてくるのが恐ろしくて、一生懸命逃げました。

毎日毎日びくびくしながら 10 月になってしまいました。毎日のように、妹を「人にあげろ」と言うのです。これ以上この家には、せつかく生死を共にしてきた妹も、人手に渡されるか、冬の寒さでまた病気になってしまいます。わたしは逃げる機会をねらっていましたが、なかなかいい機会がありません。ある夜、妹がおしっこ、と言うのを機会に、妹をおぶって山の方向に逃げました。ソ連軍や暴徒の多いその当時、男の人でも夜は外に出ません。山に逃げたわたしたちふたりを大声で呼んでいましたが、追つてこようとはしませんでした。妹をおぶって山から山へ、何時間くらい歩いたのかわかりませんが、行く先が黒く見えたので、側に行ってみるとなんと絶壁でした。疲れたので、絶壁の近くにいると、狼の遠吠えが聞こえてきます。その時、世の中にわたしと妹だけが残ったようで、初めて孤独を感じました。こんな毎日がいつまで続くのかと思うと、死んでしまったほうが、と思うようになりましたが、日本が敗戦したのを知らないわたしは、日本の軍隊を信じ、「死んでたまるか、いつかきっと、日本の軍隊が戻つて来るだろう。それまで我慢しなければ」、と決心し、月の光を頼りに山から下りて、道ばたのそば畑に入り、刈つてあるそばを下に

敷き、妹を抱いて横になりました。中国の東北地方は10月に入ると朝には霜が降りて地面が白くなるので、寒くて寒くてなかなか眠れません。何も知らない妹は、「お姉ちゃん、寒いわ。どうしておうちに帰らないの」と聞くのです。「そうね。明日おうちに帰ろうね」と小さな声で唄を唄ってやると、妹も疲れたのでしょう、すやすやと眠ってしまいました。わたしも疲れが出ていつのまにか眠ってしまいました。

夜明けの寒さで目が醒め、1軒の家に行き、お湯を飲ませてもらい、体が温かくなりました。その家は、おばあさん1人で住んでいて、親切な蒙古の人で、息子が部落長でしたので、息子さんの家に引き取られ、働かせてもらいました。

敗戦を知り、妹を連れて結婚

この時点で終戦の日から2、3ヶ月は経過していたものと思われるが、初枝が敗戦の報を聞いたのは、それからまた数ヶ月が過ぎてからのことだった。

春になり、日本語のわかる人から日本が敗戦したことを聞きました。もう何の希望もありません。妹と生きていくために、すすめられるまま中国人と結婚しました。

生きなきゃだめでしょ、何をしても。はじめは蒙古人のところに妹と2人でいましたけど。妹は小さい時かわいい顔してて、みんな欲しがります。でもあげないで、妹も連れて結婚しました。

夫は蒙古人。徴兵されて、日本軍（マ、満洲国軍と思われる）の兵士だったこともある。結婚後は興安近くの烏蘭浩特^{ウランこうとく}に住んだ。夫の郷里である。

妹のために結婚したようなものですからね。妹も一緒に（烏蘭浩特に）行って。そしたら主人の姉さんの旦那さんが、姉さんが死んで次の奥さんに子どもがいなかったもんだから、そっちでかわいがってもらって。妹はうちと、その兄さんの家といたりきたりしてましたね。かわいがってもらって。

引き揚げられなかった理由

その頃（結婚した1946年頃か）日本に帰れるっていう話もあって、主人も「帰れ」って言うてくれて。わたしは帰るつもりだったんだけど、妹が「帰らない」って言うて。かわいがってくれるもんだから、離れるのが嫌だったんでしょう。妹置いて帰るわけにいかないでしょう。そんな、悪いでしょう、妹だけ置いてくなんて。結婚もしてたし。結婚なんてそんな、遊びでしてるんじゃないんだから、簡単には別れられないでしょう。

中国でだってそうですよ。最近の若い人は。気に入らないからって別れるんでしょう。そ

んなもんじゃありませんよ、結婚は。一度結婚したらそんなに簡単にはねえ。その時の女の人はみんなそんなですね。今の人だったら別れて（日本に）帰っちゃうかもしれませんね。でもわたしは離婚なんて考えはなかったから。そういう考えがないから。

結婚は本人の意思によるもの、だから中国人と結婚した日本人については、自主的に残留したものとみなす、という見方もある。生きるために結婚した、と言う初枝が、その結婚を決めたのは、「いつかきっと、必ず日本に帰るのだ」という固い決意と、幼い妹を守ろうという固い決心からだった。離婚して、妹を置いてひとりで日本に帰るという選択肢もあるにはあった。しかし、生死の境をさまよいつづけた逃避行の中でさえ、妹を手放さなかった初枝に、妹だけ置いて帰るなどとは到底考えられなかったのだろう。離婚という考えさえなかったと言う。帰りたくても帰れない・・・。

何が力だったのかって言ったら、それはもう「日本に帰りたい」ですよ。それだけ。

日本に帰りたい。それだけを念じて生死の境をくぐり抜け、辛い労働に耐えた。それからはその思いを胸に秘めたまま、中国での生活が50年間続くことになる。

4. 中国での生活

国交断絶まで

結婚後しばらくは夫とともに農業に携わった。日本人が少ない地域に妹と2人きり。現地の中国人の日本に対する恨みつらみは、残された初枝に向かった。

生活は前より落ち着きましたが、言葉の問題、慣れない中国の生活、主人の親戚の人たちのいじめ、町を歩くと「日本人だ、日本人だ」といやな目で見られ、苦労は絶えませんでした。はじめわたしは、中国人がどうして日本人に憎しみをもつのか、わかりませんでした。言葉がわかるようになり、日本のしたことがわかってきました。でも、日本に帰る望みもなく、中国人と結婚し、中国で生きていくには、いろいろなことを一生懸命習わなくてはなりません。靴の作り方、綿入れの着物、ズボン(の作り方)など、中国の人が教えてくれたり、見ておぼえたりしました。

1953(昭和28)年頃再び帰国のチャンスがめぐってくるが、長女を出産した直後だったため見送った。そうこうしているうちに、日中の国交・つながりは全面的に断絶してしまう、1958(昭和33)年のことである。

ハイラルに移り住んで

初枝は1958年には興安の会社で働きはじめていた。その後1962(昭和37)年にハイ

ラルの町に移り住んだ。

結婚して5、6年目、わたしと主人は町で、会社で働くようになり、わたしは日本人の名を汚さぬよう、人一倍働きましたので、会社の人たちからも信頼されて、心も落ち着いてきました。

興安では主人と同じ会社でした。(子育てをしながら働くのは) たいへんってことはなかった。苦勞には慣れてるから、苦勞とは思いません。仕事が終わらない時なんて、子どもがいる人とかお姑さんがいる人とか帰らせて、わたしがみんな1人でやっちゃいました。表彰されたこともあるんですよ。そしたら、「日本人は1人しかいないのに表彰されて、それに勝つ中国人はいないのか」なんて言われてね。

ハイラルの町に移り住んでからは、ご主人は穀物などの配給所の主任、初枝は青物の引き卸の会社に勤めた。最初は店頭での販売を担当していた。子どももまだ小さく、手がかかる時期だ。文字通り、寝る暇もなく働いた。

朝の4時から午後の4時まで12時間。もう1人若い男の人がいて、交代でしたけど、その人の代わりをしてあげたこともある。そのときは、また続いて夕方の4時から朝の4時まで。わたしはそれをやったこともある。

子どもたちが学校行くようになったら、中国には給食がないので、お昼に家に帰ってきて、作って、食べさせてまた仕事に行って。小さい時は、お節句とかなんか、中国人で餃子つくったりなんかするじゃないですか。その時はわたしがいなかったら子どもたちは食べられない。だから朝2時頃起きて、わたし作るんですよ、ひとりで。食べさせて会社行って。お正月の晴れ着も自分で作るの、夜の1時から。夜はちょっと帰り遅くなってもがまんしてもらったけど、子どもが大きくなってからは、わたしが遅くなっても自分たちで作って食べてましたけど。

何年か店頭販売を勤めた後、会計の仕事を担当した。55歳で定年を迎えるまで勤め上げ、定年してからもボランティアのような形で仕事を続けていた。初枝は仕事が正確で、会社から絶大な信頼を得ていたようだ。

日本人が1人しかいない環境の中で、よくも悪くも注目を浴びる。「日本人の名を汚さぬよう人一倍働きました」とあるが、人一倍どころか人の2倍も3倍もがんばって働いていた様子が目に浮かぶ。体力的には限界ともいえる生活だが、周りの人からの信頼が得られて、束の間、心の平和が保てた時期である。

「お母さん、日本人でどうしてこんなに悪いの」

その後、子どもたちが学校に通い始めて歴史を学ぶようになると、また心に波風の立つ日々がはじまった。

子どもたちが学校に通うようになり、わたしが前から心配していたことが起こってしまったのです。学校で歴史を習いはじめると、日中戦争のこと、映画やドラマでも日本軍がした悪事が出てくるようになりました。「お母さん、日本人でどうしてこんなに悪いの」と言うようになり、学校でも母親が日本人だと言われていたようです。家に帰っても、わたしには何も言いませんが、学校で喧嘩をするようになりました。原因はわたしが日本人だからです。母親が日本人だとしても、子どもたちにとって、母親です。わたしのことで何か言われると我慢できなかったのでしょう。母親として一番辛かったことです。わたし自身はどんなに辛くてもいいが、子どもたちにはわたしのために辛い思いをさせたくありませんでした。

文化大革命の頃

追い討ちをかけるように、1966(昭和 41)年、文化大革命が始まった。国交断絶の頃、初枝の名前と中国の住所が新聞に掲載されたことがあり、それを見知った初枝の祖母から本や手紙が送られてきたことがあったそうだ。そのことも影響したのだろうか。

会社の友達から親しまれ、中国の生活にも慣れてきたわたしたちに思いがけない災難が起きたのです。世界に知られた、1966年、中国で始まった文化大革命でした。中国の高級技術者学校の先生、会社の社長など、次々に疑われるようになったのです。まして、国交のないままの日中関係が硬化してきた時、中国に残された日本人は、「帝国主義侵略者」と呼ばれ、主人や子どもたちにも辛い思いをさせました。薄らいできた悲しい過去が、また頭の中を走馬燈のように回り始めました。日本が悪いとはいえ、わたしたちの親の時代に国が犯した罪を、21年後の現在、当時子どもだったわたしたちが、わたしたちの子どもまでその罪を、いつまで背負って行かなければならないのでしょうか。

1966年ですね。文化革命っての。わたしは外国人だから、この革命は国の中のことだからってわたしには関係ありませんでした。でも主人は呼ばれましたよ。わたしが日本人で外国人だから。いろいろ聞かれたみたいですよ。それから子どもがね、日本人の子だっていわれていじめられて、かわいそうでした。

文化大革命っていっても、わたしたちみたいな外国人は、わたしたちのところでは参加させなかったんです。会なんか開いてもわたしたちは参加させない。中国の籍に入っていない者はね。小さい時から何をやってきたかっていうのを書かされたりしました。それだけです。わたしの主人は連れて行かれました。わたしが日本人だからでしょう。子どもにも主

人にも、迷惑をかけました。

昔日本人の仕事してたとか、日本人の店で働いてたとか、通訳だったとか、そういう人はやられるんですよ。国民党だったとかね。すごくぶつんですよ。怖がって逃げる人もいた。そういう人たちは逃げる所があるんでしょ。わたしなんか逃げる所もありやしないですよ。

わたしが日本人だから、スパイだとか。(中国に来た時は) 子どもだったのに何がスパイなもんか。子どものスパイなんてねえ。わたしの写真なんてみんな持っていかれて。

その時は日本語なんて、(使っては) だめですよ。日本のスパイになっちゃいますよ。あの時は、孤児だとみんな小さかったから、孤児はやられてないでしょ。大きくなってた人はひどい目にあった人もいるけど、(孤児は) 日本人って言わなければわからない人がたくさんいるんですから。わたしたち(残留婦人)は、わたしたちだけでなく、子どもも迷惑なんですよ。お母さんが日本人だからって、いじめられて。

自分のせいで子どもや夫が嫌な思いをする。自分が責められるより、ずっとずっと辛い。いつも明るく、辛酸を極める経験を乗り越えてきた初枝。話を聞いていても、全く愚痴っぽくならない初枝が、さすがにこのときは辛かったと言う。思いを分かち合えるはずの日本人が皆無の地域で、慰めてくれたのは、日本の歌と中国の友人たちだった。

悲しい時には近くの川のほとりで、きれいな月を見ながら、小さな声で「荒城の月」の4番を唄います。「天上影は変わらねど、栄枯は移る世の姿、写さるとか今もなお、ああ荒城の夜半の月・・・」どんな辛い時でも人には見せたことのない涙を、どれだけ1人で唄いながら流したことでしょ。いつも胸の中に涙を飲み込んで来たのです。涙を流したからといって、昨日が戻ってくるはずがありません。会社の友達も、「きっといいことが来るさ」と陰ながら慰めてくれました。中国でいろいろ辛いことがありましたが、耐えてこられたのも、優しい、親切な中国人の助けがあったからです。今でも感謝しております。

5. 国交回復と一時帰国

国交回復の頃

1972(昭和 47)年に日中の国交が回復した。1974 年から中国残留邦人の肉親捜しが始まった。残留婦人の一時帰国の旅費を日本政府が出すようになり、帰国者は激増した。初枝も 1975(昭和 50)年に5カ月間、当時14歳と11歳のふたりの子どもを連れて一時帰国している。

1972年、田中総理大臣が中国に訪問され、わたしたちが長年願っていた日中友好が結ばれ、映画で、懐かしい富士山の姿をみた時、はじめて人前で涙を流しました。日中友好のおかげで、1975年に、31年ぶりに祖国日本、生まれ故郷の東京に、日本と中国政府のおかげで里帰りができました。友好条約が結ばれ、映画や新聞にもいろいろ日本の状況が載るようになり、突然、日本が近くなったような感じがしました。

ハルビンなど、日本人が集住していた地域では情報も入りやすく、1972年以降、個人的に日本と中国を行き来していたという例も少なくはない。だが、初枝が住んでいた地域には日本人がほとんどおらず、情報も入りにくかった。噂を聞いても、問い合わせることすらできなかった。文化大革命の恐怖がまだ尾を引いていたのである。

日中友好になって、国からお金出してくれて帰れると聞いたけれども、問い合わせる先がわからなかった。聞いてもし帰れなかったら、子どもとか主人にも迷惑かけちゃう。文化大革命の時のことがあるから、こわいんですね。後で、公安局のほうで、日本人を集めて、説明してくれました。だけど、手続きどうやってやるかわからない。北京^{ぺきん}の日本大使館がどこにあるのかも、知らなかったですから。日本人が少なくて、何もわからないんですね。

国交は回復しても、外国人の立ち入り制限は続いていた。国交回復以来、満洲時代にハイラルの小学校に在籍していた元関東軍の軍人子弟や、ノモンハンでの戦友に花を手向けにくる元軍人など、ハイラル近辺を訪れる日本人観光客も現れた。初枝は時々頼まれて観光客の通訳を務めるようにもなった。それもやはり、不安を抱えながらのことだった。

連絡しなかったら、わたし勝手に行かないから。なんかされるのも、こわいからね、後で。大革命の時なんて、たいへんだったんだから。気をつけないとね。日本人が来ても、「ああ、日本人が来たなあ。あそこにいるなあ」って思ってみてるだけ。自分勝手に行って話したりしない。

作家、渡辺^{わたなべ}一枝^{いち}や、班^{はん}忠^{ちゅう}義^ぎ⁸も、この頃ハイラルの初枝を訪れている。渡辺一枝はその著「ハルビン回帰行」⁹の中で、「残留婦人Nさん」として初枝のことを紹介している。

2度目の一時帰国

1989(平成元)年頃、2度目の公費での一時帰国のチャンスがあった。日本の身内の反対でそれはかなわず、残留婦人の帰国活動に早くから取り組んでいたボランティア団体、春陽会の一時帰国団に加わることになった。

1度里帰りして、14年後厚生省で再帰国として旅費を出してくれることになったのですが、わたしの、日本にいる肉親は、私の再帰国を嫌って、手続きをしてくれませんでした。平成元年10月、春陽会のおかげで、2度目の帰国ができました。里帰りというだけで、実家には帰れませんでした。府中市の市役所婦人部の方々が、暖かく迎えてくださり、短い1ヶ月でしたが、楽しく過ごしました。渡辺一枝さんが、この時わたしを出迎えに、空港まで来てくださいました。

春陽会の一時帰国の第1弾なんですよ。その前にも、日本へ帰りたかとか、子どもが何人いるかとか、日本に帰ったらこういう仕事があるかと言ってきてくれた団体があったので、書類は書いたんだけど、その後は何にも音沙汰なし。だから、わたしもあきらめてね、主人もいたから。そしたら突然、春陽会のほうから、手紙がきて、「日本へ帰りたか」って。そして、もし帰りたかったら、親の名前、本籍、いつ里帰りしたか、前にどこにいたか、それを書いてくれって。それで、わたしは言った。「もういいよそんなの。帰れないんだからもう、書かなくてもいい」って。でも「書いてみたら」って、家族に勧められて。「もしかしたら帰れるかもわからないよ」って。じゃあ、書こうかって言って、おもしろ半分を書いて出したんですよ。その後、戸籍謄本はどうしようかって困ってたら、春陽会の会長さんが送ってくれました。

東京、府中市に滞在した春陽会の一時帰国団のことは、永井ヒサ子の自伝¹⁰に詳しく書かれている。この一時帰国の2年後、初枝は永住帰国を決意するが、肉親はやはり、身元引受人にはなってくれなかった。

6. 永住帰国

永住帰国：1994年

1991年、主人も亡くなり、子どもたちもそれぞれ家庭を持ち、親として妻としての責任も終わりましたので、日本に引き揚げることを決心しましたが、肉親は誰も身元引受人になってくれませんでした。日本に戸籍もあり、いつか必ず日本へと思っておりましたので、中国の籍にも入らず、日本人としてがんばってきたわたしは、考えてもいなかった「身元引受人」という壁にぶつかってしまいました。あきらめていた所、前にハイラルに住んでいた時、旅行に来られて知り合った、^{ひがしむらやま}東村山市に住んでいる^{いわた}岩田さん（女性）が、「わたしでよかったら」と言ってくれて、わたしの身元引受人になってくださり、平成6（1994）年4月に帰国することができました。

初枝の帰国の際の身元引受人を買ってでてくれた岩田という女性は、ハイラルを訪れた元軍人家族の1人だった。

家族の呼び寄せ：1997年

永住帰国から3年後の1997(平成9)年に、子どもたちの家族が日本に移り住んできました。呼び寄せる手続きにも、来日してからの生活にもやはり、苦労は絶えなかった。

子ども来させるのも苦労して。ひとりで帰ってきたから。結婚したってという記載が何も無いんですよ、わたしの戸籍には。向こう(中国)じゃこっち(日本)のほうから「証明もらえ」って言うわけ。それだからわたし、法務局行ったんですよ。「結婚したって証明書いってくれ」って。そしたら、「あんたは中国で結婚したんだから、こっちで証明できない」って。中国で、もう子どもたちが走り回って、やっとな書いてもらって。もうわたしも子どもたち来られなかったら、どうしようかなと思って。何年かいて、また帰ろうかなと思ってました。

やっとな来たけど、でも子どもたちはやっぱり、蒙古に帰りたい。わたしなんて中国にいたほうが、時間が長いでしょ、50年。日本になんて、10何年しかなくて。だから、日本にいたこと、覚えてるのは、5歳くらいから8年間くらいの思い出。それでも帰りたいと思う。子どもたちなんて、もっと帰りたいですよ。「帰る帰る」って、言ってる。

来た時はほんとに困ったけど。仕事もないし、なにか仕事を探してくれたらなあってわたし、思ったことがあるんだけど。前は相当いろんなことしてくれたいですよ。子どもにも生活保護くれて、日本語習わせたり。子どもたちが来た時には、もうそんなことは全然ない。

帰国してから3年目に、子どもたちを呼び寄せました。日本語のわからない子どもたちは大変でしたが皆何も言わず、がんばっております。

これからの心配ごと

2003(平成15)年現在で子ども家族は滞日6年目。今の一番の心配事は、子ども、孫たちの将来のことだと繰り返し語る。子どもたちは現在40歳から50歳くらいになる。介護保険の支払いも始まり、国民年金の掛け金も払っているが、果たして受給資格が得られるまで日本にいるものかどうか。子ども家族の生活の安定のためには、子どもたちはいつかは中国に帰ったほうが良いと、初枝は考えている。

今一番気になるのは、子どもたちの行く末ですね。早く来た人だったら、子どもたちをつれてきてから20何年もなってるでしょう。そういう人たちは年金も全部納めてるじゃないですか。そいであの頃は景気がいいから、仕事でも成功した人もいるけど。うちの子どもたちが来たのは遅かったし、不景気だったでしょう。だから、年金もそんなもらえるわけじゃないし。

わたしは「帰れ」って、言うんですよ。年金が2万円ぐらいしかもらえなくて、仕事は歳とったらなくなるし、どうやって食べていくんですか。それで、こんなたくさんの2世に、生活保護くれるわけないでしょう。

うちの息子、「お母さん、ぼくたち帰る時はおかあさん帰ろう」って。「家を買うから、お母さん一緒に帰ろう」って言うから、「とんでもない、おかあさんやっとなんか日本へ帰ってきて、50年ぶりに帰ってきたのに、(中国には) 帰らないよ、ここで死ぬよ」って言ったの。子どもたちは親を1人残しとくのも心配でしょうけど。死んだ後、どこへ持っていこうか、お骨はどこでもいいよ。そんなこと、気にしないから。火葬して、お骨もって帰ればいいじゃない。お墓やお葬式にお金使わないで。子どもたちはお墓のことも心配してますけど、金のお墓つくってくれたって、お母さんは何もわからないから、そんなことしなくていい。お母さんが生きてる時、兄弟仲良く、夫婦仲良く、これが一番の親孝行だって。そんな余計なお金使わないで、「死んだ後だったら中国でもなんでもどこでもいいよ」って。おかあさん死んだら、火葬して、中国でも持っていきな。生きてる時だけわたし日本にいればいいんだからって。

このばあさんが死ななかつたら、子どもたちだって年とってくるじゃないですか。あんまり年とって中国へ帰ったって、何もできないでしょう。貯めたお金で食べるしかない。だからもうそんな年取る前に帰ったほうがいいって言ってます。うちの息子が「おかあさんがいる時は帰れないよ」って言うけど、いや、お母さん死ななかつたらどうすんの、90歳まで死ななかつたらあんたたちもう60、70だよ。それこそじいさんになっちゃうじゃない。だから帰りたかつたら帰っていいよって。

なんだかね、子どもたち、このままここにいちゃ、年とったら、生活ができないと思う。前から来た人は、相当お金貯めてる人もいるけど、うちの子どもたちなんて、やっとなんか5、6年でしょう。孫が中学1年と、小学校6年。塾とかなんかでお金使うじゃないですか。

今孤児たちが、国家賠償の裁判してるけど、自分たちのことより、子どもたちのこと考えてほしいって、わたし本当に思う。弁償してもらってどうなるんだろう。年とってれば、今は生活保護もらえるじゃないですか。だからいいじゃないの。子どもたちどうするんだろうって、思う。年金だって少ししかもらえないし、その時代にあるかないかまだわからないって言うてるでしょ。今ね。

現在の活動：講演・翻訳・通訳

日本に永住帰国して2003年現在、9年目を迎える。初枝は今は帰国者の相談にのったり、依頼があれば小学校や中学校、高校での講演を行ったり、ボランティア団体

の機関紙などの中国語訳を引き受けたりと、忙しく過ごしている。人前で話すのは嫌だ、と言う初枝が敢えて講演を引き受けるのは、どうしても言い置きたいことがあるからだ。

終戦から日本に帰ってくるまで、いろいろなことがありました。思えば終戦の時、行くところも住むところもなく、妹と畑の中にかくれていた時、親切な中国人が食べ物を持ってきてくれたりした。心の暖かさはいつまでも、いつまでも忘れません。このように、終戦で広野に見捨てられ、20 何万の開拓民の多くは、戦争に倒れ、暴民に殺され、帰国の希望を失った人たちは、集団自決し、飢えと寒さで命を落とした人たちは、遠い異国で祖国を思いつつ亡くなっていったのかと思う度に、今、生き残り、日本に帰ってきたわたしたちは、ただただ亡くなった方々のご冥福を祈るばかりです。日本に帰ってきておぼえた唄ですが、「海峡飛び立つ海鳥よ 翼をおくれ私にも 望郷千里の血の涙 幾度幾度流して耐えたやら」この唄のように、1 日も祖国を忘れたことはありませんでした。

講演は、^{さんごかい}三互会、孫が通っていた小学校、^{かつしか}葛飾区立^{よつぎ}四ツ木中学校と^{あだち}足立区立^{かばら}蒲原中学校と4度の経験がある。なかでも蒲原中学校での講演がひとときわ心に残っている。

わたしが行く前に、生徒さんたちは「大地の子」のビデオを見てたんです、学校で。少し事情を知ってから、わたしが話したんですよね。その時、生徒さんたちが感想文、書いておってくれたんですよね。それで、「大地の子」を見て、いろいろな苦勞がわかったけれども、須田さんたちがこんな苦勞してるとは思わなかったって。須田さんはえら行って、自分たちだったら妹を捨てて逃げちゃうかもわからないとか。希望もなくしちゃう、とか。いろんなこと書いてくれて。須田さんはずっと妹さんを捨てないで最後まで逃げて、希望をなくさず日本へ帰ってきた、とか。そんなこと書いて、送ってくれましてね。ああーわかってるんだなーと思って。

今だからこそわかってほしいこと

初枝は、永住帰国以来ずっと、敗戦時の苦勞、中国での苦勞を日本の人、殊に肉親にわかってもらえない、という不満を抱き続けてきた。周囲の人々の反応にも傷つけられてきた。

行ってなかったら、わからない。帰ってきた親兄弟だったら、このつらさもわかる。だけど、こっちの人たちなんて、なんか言うと、「ああ、お互いさまだ」って。終戦の時は、こっちだって苦勞したって。お互いさまにはお互いさまかもわからないけど、あんたたち日本の国の真ん中じゃない。どこにいたって、みんな日本人でしょう。わたしたちは敵の真ん中で。日本人なんてみんなバラバラで、どこ行っちゃったかわからないじゃないですか。だから、「それはお互いさまじゃない」って。日本にいれば、どこみても日本人じゃないですか。言葉も通じるし。そりゃ、空襲とかなんかで苦勞したでしょうけど、わたしなんて

妹とふたりきり。周りなんて敵と同じでしょ。いつ殺されるかわからない。だから、わたし、経済的にはお互いさまかもわからないけど、やっぱり、精神的には、違うって。そんなこと言ったら、黙ってたけどね。うちの親戚なんて、「ああ、ご苦労さま。苦労したね」とか、言う人もいない。当たり前みたい。

残留孤児も残留婦人も、「自分で好きで中国に残ったんじゃない」って、それだけはみなさんに分かってもらいたいって思って書きました。好きで残ったように言う人いるでしょ。「須田さん向こうに何年いた」って。「50年」って言ったら、「ああ～そいじゃ帰りたくなかったでしょう」、なんて。向こうのほうがよかったんじゃないの、なんて。そんなこと言う人もいるのね。なんだか、日本が無理矢理こっち連れてきたみたい。帰りたくなかったでしょう、なんて。

日本が豊かだから日本に住みたいって人もそりゃいるでしょうけど、わたしはもう、行った時から日本に帰りたかったんです。今の人が海外旅行なんかしたってそうでしょう。日本がいいなって思うでしょ。50年間ずっと帰りたかったんです。主人と一緒に帰らないっていうんで、諦めてましたけど。若い時は忙しくて気も紛れるけど、年とったらどんなとこでも祖国がいいんです。中国のことわざで「葉っぱは木の根元に落ちる」というのがあってね。もとのところが一番いいんですよ。

子どもにも孫にも語ったことのない話。初枝のライフヒストリーは、今だからこそ語られる。



<注>

- 1 東京開拓団については、後述の坪川秀夫の著作の他に、足立守三『曠野に祈る：東京開拓団・隠された真相』恒友出版、1982年、がある。また、満洲開拓史刊行会(1966年)のpp733-743には、副団長だった足立守三の手記を含む東京開拓団の記録が記載されている。
- 2 坪川秀夫『棄て民よ蒙古嵐は祖国まで』新日本コミュニケーションズ、1994年、p11
- 3 坪川前掲書 pp27-32
- 4 満洲開拓史刊行会『満洲開拓史』1966年、p733
- 5 坪川前掲書 p11
- 6 坪川前掲書 p11
- 7 ここで別れた、男性1人を含む一家4人が、上記『棄て民よ蒙古嵐は祖国まで』を著した坪川秀夫の一家であった。この時の様子は坪川前掲 p53にある。
- 8 班忠義『曹おばさんの海』朝日新聞社、1992年。班忠義『近くて遠い祖国』ゆまに書房 1996年
- 9 渡辺一枝『ハルビン回帰行』朝日新聞社、1996年。「ホロンバイルの草原で」の章に登場す

る残留婦人Nさん、というのが初枝のことである。

10 永井ヒサ子『中国残留婦人の手記』1992年(自費出版、武田英子発行)pp96-111に春陽会による一時帰国団のことが書かれている。永井は帰国団の団長、初枝は副団長を務めていた。pp116-137には迎え入れた府中市婦人部の担当者の談話なども掲載されている。

聞き書きを終えて

須田初枝さんへのインタビューは永住帰国直後の1994年11月に3回と、2003年3月に1回、計4回、のべ13時間にわたって行った。1994年のインタビューは、筆者の修士論文のために行ったものである。須田さんが永住帰国後通っていた日本語学校の担当教師から紹介を受け、当時住まわれていた東京、葛西の常磐寮^{かさい ときわりょう}を訪問した。1995年初めには現在お住まいの都営住宅に移り住んでおられた。今回の聞き取り調査の調査対象者一覧にお名前を見つけ、8年ぶりに再会が叶った。その折りには、須田さん自筆の講演原稿(約8,000字)を頂戴した。このライフストーリーは、インタビューの書き起こしおよび、講演原稿を原資料として構成した。書き起こしの際にはできるだけ逐語に近くするように努めたが、ここに使用した抜粋は、感嘆詞を省き、単文を複文化するなどの編集作業を経たものである。また、ご希望により削除した箇所もある。

須田さんは、中国では内モンゴル自治区に住み、中国語、蒙古語の両言語を使って生活されていた。ほとんど日本語が使えない環境に暮らしていたにもかかわらず、帰国当初より日本語での会話に不自由はなかった。また、記憶も非常に明晰で、舌を巻くばかりだった。

国思う 道に二つはなかりけり いくさの庭にたつもたためも
これは、小学校3年生の時に担任の先生から教わった句だそうである。このように、幼い頃のことについても具体的などころまで鮮明に覚えておいでだった。

日本語については、ご自分の頭の中だけで日本の歌を歌ったり、国交回復により一時帰国が叶った後は、かろうじて聞こえてくるNHKのラジオ放送に耳を傾け、小説を読んで、日本語を維持しようと努力を重ねておられたそうである。その努力もさることながら、言語能力、記憶力ともに優れた方のようにお見受けした。帰国後詠んだという俳句や短歌の作品を見せていただいたこともある。

バクチクの音にめざめて思い出す 幼き頃の羽子板の音
秋ふけて飛び行く雁の影みれば しのぶ心は我が子どもたち
親思う心にまさる親心 わかってみればいまおそくなり
ハイラルの町は変われど西山のみどりの松は今もかわらぬ

永住帰国のために成田空港に降り立ったのは1994年4月11日、上記の句はいずれもその後、日本語学校に通っていた間に詠まれたものである。亡き親を思い、中国に残した子どもたちを思い、日本と中国のなつかしい土地を思う。その望郷の念は、終わることがない。

須田さんの経験は、15歳という年齢で終戦を迎えている点が注目に値する。当時3歳の妹さんを背負い、妹さんのために中国に残ることを決意した、と仰る。8月9日以来、終戦になったことも知らずに逃げまどい、中国人家庭に入ることによって何とか生き延びてきた。15歳、政府が「帰国

に関する判断は可能」とした14歳を超える年齢である。戦争が終わった、ということも知らないのに、引き揚げの手立てなど知る由もないことだっただろう。それでも帰国に関する判断は可能だったといえるのだろうか。

集団自決の場面をかいくぐり、辛い労働に耐え、狼がひそむ山道を逃げる。たった15歳の子どもに、どうしてこれだけの知恵と力が湧いたのだろうかと思う。妹を守ることで生き延びよう、いつかは帰ろう、という思いも強くなっていたのかもしれない。守るべき者がいれば、心は強くなる。逃避行中、軍隊の命令で子どもを捨てさせられた母親たちや老親を捨てさせられた息子たち、娘たちも多数いると聞く。守るべき者を失った彼らは、生きつづけようという強い意志をも失うことになったのではないだろうかと思う。

強い意志と、優れた能力。逆境にあっても希望を忘れない強さ。ほんとうに希有な存在だと思う。出会えたこと、語っていただけたことに、心からの謝意を表したい。歌が大好きな須田さんが、永住帰国後によく聞いているお気に入りの歌のひとつに「望郷千里^{ぼうきょうせんり}」という歌がある。その歌詞の通り、戦の嵐にいたぶられ、昭和に幸せを置いてきた須田さんのこれからの日本での生活が、春の夜明けのように心安らかでありますようにと祈らずにはいられない。(さとう ともこ)